

剪花翁傳

夏

六五四月月

農			
和			
第			
共			
庫	文	閣	內
九	一	一	和
九	九	七	書
齒	四	八	門
一	八	八	類
架	冊	號	類

庫文官政大			
和			
書			
門			
		一	九
		二	〇
		九	七
		八	八
四	二	九	八
冊	架	函	號

耕種

內閣文庫	
番號	和 10978
冊數	4 (2)
函號	199 379



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



南園
文庫

剪花翁傳前篇卷之三

四月開花之部

元日之春之例

豊産

○白兔花

真の免の花 色潔白 開花四月上旬 英大さ 南燭の英の房の形に紫縷の房はととの毎葉の間より 左右小出て長く 伸と満開を積る 育方 井水の方 櫻免の花小日

○金樺

早夏菊 花八重 色濃赤茶 開花 月上旬より下旬まで 方日向 地二分湿 土回肥 淡小便 分株 株小芽のとき 秋彼岸より 鉢取 追ふ 正月迄小針より 苗代ととて 櫻十日よりして 根付らると 淡小便

剪花翁傳前篇卷之三

明治十二年購求

と澆ぐへー畝小移して壅土と寒前小入寒中より五月中淡大便と入へー西北の
風防と高さ二尺許花終るまで團ひやべー苔萌る前より肥氣を忌む
肥と澆べ花より出て出さるゝ又株の芽と其終る時を成長とが
たとの成長とても老りくまゝと菊吸虫の生とと甚くは株の不用の
芽と共小掘捨てー升水の方の切口と焼くゝ又和木艸と扱と能焼もじ
已下の夏秋寒の諸菊も育方水上の方等並ひはド

○化偷艸

花黄色 葉赤形ち蘭小似たり根も亦のく 閑花四月上
旬より五月小至る大概盆植物の方半蔭地中干土回壅入砂壅土肥油粕
春芽出の頃淡小便と澆ぐへー分株春彼岸より芽ののえ

易れものゆゑ半蔭と好り能育つもの高さ二尺五六寸りやぶかり
升水の方切口と焼くゝ

○石竹

花赤色 閑花四月上旬 方日向 地一分湿 土摺る 肥
壅交り土又淡小便 下種 秋彼岸 移十月中旬

○薊

花の色紅又淡紅又本紅又絞り又紫と色と十種ありあり 閑花
四月より後々その霜月迄なりこれ上種なり 方地土肥より下種
春彼岸此時小淡小便澆ぐべー野薊の花赤色ふまや黒く鈍く下品
此種小葉の蠟引と似てそのあり又鬼薊を芒刺甚くは非常の種け
きわみ葉光りありて花濃紅くを美なり又白花小三種あり二種大小

前記の如く專前篇卷之三

一種ハ莖六角ノ如ク英多ク高ニ三尺ノ升水の方剪得ク少割ルル少一
潤ニテ切口トシテ焼冷水ニ挿ヤベ一又方切セテ割和木州
唐鹿尾藻者ニ味トシテ冷水ニ挿ヤベ一

○漢蓀 花白青又姫あまあり花青一ツノ莖も 開花四月上旬

方日向地二分湿土ニ挿ヤベ一 水氣ハ少キ方一 肥小便芽出—前ハノビ

芽出—後ハノビ—分株春彼岸十日前—

○青杜艸 花白形南燭の英ハ似テ開花四月上旬 方地土肥ニ

莖葉も亦南燭の芽ニ似テ少敷本出ク株トアリ長七八寸
より一尺ふやぶ分株春芽出—前又九月末ハ茶室の挿花ニ用ル

○櫻艸 數種 花赤又淡紅 開花四月上旬 方日向地二分湿土莖交又

砂雜— 肥油桐春彼岸芽出前ハノビ 下種春彼岸分株秋彼岸トシ

○玫瑰 花白淡赤赤白紋 開花四月上旬 方三分陰地二分湿土回莖

肥大便寒中小ハノビ—分株寒中— 形薔薇ハ似テ芒刺多ク抄ノ葉

のどク繁密ニ升水の方切口ト刻和木州トシテ挿ヤベ一

○風車 花白葉淡赤小青ニ會テ葩中ハ隈ニ開花四月上旬 方半陰

地二分湿土ニ挿ヤベ一 肥淡小便春彼岸芽出—の時一兩度トシテ

分株春芽出—後ハノビ—形デシハ似テ

○石南花 花重色淡紅形蔓豆ノ如ク 開花四月上旬 方日向地二

分湿土生肥于鰯 移春ひんよ

○薔薇 花濃紅 開花四月上旬 方日向地三分湿土をくり肥于鰯

油粕二月上旬一度九月上旬一度へく 摺した春彼岸 移ふ冬ゆ月よ

○白薔薇 花千重色白 開花四月上旬 方地土肥摺移等蓄

薇小同く葉は形うら玫瑰小似く大きく山吹やまぶの芽出し細く

長く根ね蔓つたあり

○馬蘭 花青色白を平らくく之を葉厚く堅く幅狭く開花

四月上旬 方日向地干土砂雜肥大便寒中へく 春淡小便兩三度をく

分ふ株 秋彼岸より早春までふくく葉く

伸のび七は寸すより二尺ふもいるく下種こハ成長ちやうサク

○鐘艸 花白く鳥うら更さくく垂低く之 開花四月上旬 方三分陰地分

湿土をえらくく肥淡小便寒中をくく芽出て兩三度をく

移うつ秋彼岸より十月までく

○紫蘭艸 紫蕙又白菱花赤く紫くかまり又白開花四月上旬 方三分陰

地中干土肥土肥淡小便花をふく分株ふ十月より寒中をく

長守のり一尺もいくるく

○仙臺菽 花黄色形豆の花小似く開花四月上旬 方日向地三分湿

土搗く肥淡大便寒中へく 移秋彼岸に升水の方ハ切て焼く

○管根兔の花

源平卯ゆり 開花四月十日前後之花より白く中頃淡

赤く後大赤く 先後は開花各色変りて紅白交を雜りて源平とある之

育方升上は方共ふさうの卵の花小同し

○芍薬花

花白淡紅濃紅紅白交等品數多し 開花四月中旬方昌

地中濕土回莖 肥大便寒中芽出さず淡小便をくぐり 分株 移

秋彼岸より上名あるは倍小まがらふ葉大總しを乱とれ葩直く

連りて莖のどく辰時刻より開き未の刻葩收て葉を掩ひ色む翌日

も開くと昨日のどく是はくあまの四五日小サづ之下品ありそのは

倍小呼く踊子とら乃ら開きさうして次第小まむひ之 升上の方切

○と焼逆水

水添小料か後用之

○丹頂花

花白鳥ら至く之く切艸の花のく 開花四月中旬 方二

分陰地ニ分濕土をく 肥大便寒中より花莖を折くさうに 櫻

春彼岸は高さ一尺より二尺餘もゆる之幹枝細く葉も之く赤く

長一歩もたれ葉一寸は間八九節此間毎小花と結ぶ恰も雪のかまはに

○白頂花

花白微赤と帯たり 開花四月中旬 育方丹頂花

同一元是同種もさ花葉も少し大きき菱細長く廣がり開きて形容

さうに似て丹頂とて花小赤とらぐく白鳥とて白くはるき小此兩種

○名稱彼

是と顛倒なり尚追考とす

○猿猴艸

花一重なり金重なり色黄之形如河骨小似より花葉は莖長
く横斜に延びて名よとて開花四月中旬盆栽少肥油粕を入る

贈小植出芽出の時淡小便西三度花前小西度凌んど分株春ひぐんはし

○紫陽花

三種色紅白藍開花四月中旬形梨花の如く英數十箇
群簇て徑三寸餘房はあつ開けを徑四五寸なり又八九寸許

小なりものまとも挿花ゆきより方日向地土をゆるし肥大便寒中

入金春彼岸より淡小便三五枚とくべし擺春彼岸より移正月

中井水の方の切はと増べし同種小班入葉あり

○樂艸

花紫陽花と同種之をこぼし挿簇し房は周りの英はひくた中開

なり英ハ色青く蕾より葉肉を見ると十分小開なり開花育方升

水の方紫陽花と同剪花者是が艸と呼ぶと名は美と云ふは之り

此房遠りの英を白く開て肉の蕾は青くして十分小開ると其貌宛も類

小似たり故に此呼ぶと云ふと思ひに果して此由て既野山草小なり

さきとて又一書小曰太鼓小がと称するものハ樂は太鼓より呼ぶるなり

かろくハ花小称するものハ繡球花なり是も太鼓より出るるなり

種數多し又大小り手球花と繡球花と書んるを此種類

の花皆樂は名なり

○松本仙翁花

花白淡赤と黒紅等之開花四月中旬育方瞿麥



石南花



ぼり 升水の方朝名の間小剪得く姑置とと一濁とる時切口とよく
焼運水と水器小杆やへ一又方切口と四つに割和木州唐鹿尾藻
右二味と挾と冷水小杆やへ後用少一

○沙羅椿

花二重色白形初嵐椿の如く一腰低一 開花四月中旬

方日向地二分湿土回莖又空は 肥大便寒中へ 接春彼岸寄接とへ一

○花菖蒲

種より 開花 紅立春より百十日頃小咲之 紫と是は後

車五日より 瑠璃紺ハ又五日より白又是は五日許おと一 村雲紋 白紺

絞網紋吹黒等の班入りとて班小六葩のゆものり是を三葩乃

八重あるものより咲頃もれ同 方日向地三分湿 土より

肥淡小便芽出の時より三度とぐべ一 其外を用ひと
移分株 春彼岸

○土圭艸

花重重形鐵線風車小似り色此三種より濃一 開花

四月下旬より五月上旬迄より 分株 春彼岸は 云方并上の方西種同ト

○唐擬寶珠艸

花白淡紅と帯より 開花四月下旬 方三分陰

地土よりと 肥淡小便冬中に三枝又芽出前より四五度とぐべ一

分株 春彼岸前又秋九月より十月より一葉より二葉を裏小粉と吹

己下の擬寶珠艸育方並同ト

○大手毬花

花初青く後白く形は紫陽花の如く一とせ

徑二寸許之開花四月下旬方日向を房よりこれを枝之三分陰あり
よく伸るも英房共まき地土を肥大便寒中へを

移冬月 櫻春彼岸 分株十月頃 升水の方の切口と一寸より
割く皮と少し爛らう 逆水へ水器小杆置べ

○並萱艸 花重重色黄して黄赤み隈り 開花四月下

旬 方櫻より地中濕土基難肥小便分株秋彼岸 同種班入葉り

○花柘榴 花千重を徑二寸許色四種 赤白縁白絞 開花四

下旬より五月咲 方日向地三分濕土を肥大便寒中

櫻葉出前より 移冬中

○鸚鵡 夏菊 色淡紅 開花四月下旬 苗方升水等諸菊小同

○防風 色白く真小細 開花四月下旬より五月まで咲 方日向

地于 土砂雜肥淡小便 下種移も秋彼岸より十月まで

升水の方の酢にて煮る

○蓮 色紅白縁紅 唐蓮ハ紅小黒をり 開花四月下旬より八月中

旬より春芽出前小泥水中に植ふは水中より甚植か
きもの之を植ふ先づ俵小土を盆根と此中に杆挟と水底小沈む
骨のうねにぬき池へも輒く植ふものを花と切得て蕾と
巻葉と水へく土をのふと開花葉を海へく葉を水

土かきし此升水好方へ石膏又は木通又は川芎をて焚出しよ
 へはし水彈きよめて切りし此藥水とけし彈き詰るし又方唐
 滑石川芎寒天各五分水一升をて煎じ又方和水州唐鹿尾藻
 各十分明礬寒天各四分水一升をて煎じ又方明礬五合清水
 一升を入搖立し少間靜定し上水一合を取氷砂糖二分を砕き合し搖立し
 右三種の内方と水彈きよめてけし彈き詰るしよ

○淺 氷の上ふ生る花白色の開花上ふ同し 挿花少を用ひしれを時り

より蓮のりしりし葉葉とてた叶ふはふもり

○虎の尾草 花白開花四月下旬より五月まで咲く 方日向 地を濕

土回壘 肥淡小便寒中に三皮又春芽出し前二皮とてふへし 分株
 十月中旬より寒中迄ふとて高と二尺四寸より三尺も及ぶ之丸葉長
 葉二種あり 升水の方へ剪りて焼べし

○鷹爪 俗小でふとふ 開花四月下旬より五月にけりて咲く勢丸

弱く甲斐がたのめ六月小咲く 方日向 地を濕 土をふり 肥大
 便寒中合し五六月淡小便とてふへしかきあせを春芽出し花の
 色がら雀見花と同しれを莖丸にて青し又花のとれ小葉を
 挿かきし 摺下種ともれ春彼岸ふとてし 移来春彼岸の古株へ
 移すも活生かに能成長すれ六尺もやぶかり幹も太くあかり

○下野花

色淡紅濃紅白三種之 一欄鹿の子花 花形小毛毬花の之より
一房平うらうと益り花の子のどく兼も小ひまりた似く之より 開花四月末

より五月よりまより 方日向 地二分湿 土砂交真土より 肥淡小ん

春ひびん二度花前より四五度度より 分株秋ひんよりより三月つ

とれを長二尺ふもつよりより

五月開花之部

○大葵

蜀葵花緋淡紅白三種之 開花五月上旬より梅天の頃小
咲之 方日向 地于 土えより 肥 淡小便時澆ぐより 下種 移

○錢葵

花赤絞 開花の時並 育方とも前小同 兩種とも水上より時ハ
切はて焼べり 又方朝夕の間小希侍 姑かれ少 凋もるより切はて

よく焼冷水漬置置る 又方切はて四割 和木州 唐鹿尾藻在時

とらと冷水漬せたる後用之 都て州花は甚潤るものと升水の

樹と施 てもやうなるもの 是をてん 剪之のどくは 藪回 して

後小升水の樹と施より 此藪回の方ハ 卷末小見より

○千艸 百合

花の色真百合の色より甚濃 一開花五月上旬より

○姫百合

花の色赤地あり黄地あり兩種とも赤ひより色の點

班入り 開花五月上旬なり

○唐子 姫百合 花の色赤くして葩厚く丸く 開花五月上旬なり

○京百合 花の色黄くして赤を浅く 開花五月上旬なり

○太田百合 花の色黄くして赤をぬく 開花五月上旬なり

○皆川白夏菊 開花五月上旬なり 延世皆川某四國より得し物の佳花なり

○木槿 花二重色白 開花五月上旬なり 方日向地二分湿 土を

く 肥 大便寒中に入ると 淡小便花前より 移櫻 春

彼岸に 播 又梅天より 此時の葉を取捨て 挿花 水の上にて

切ると 能焼 逆水にて 冷湿の地 小臥せ 薄延て 水に 覆ひ 暫く 水器に

杆やべー 己下 猪木 撞 育方 升水 方 垂の 同

○麒麟艸 花の色黄く形は切艸に似く 英集て 咲く 開花五月上旬なり

六月迄 咲く 方日向なり 花莖短く 又半陰に 植む 高一丈を 有り

ふと 莖和らうなり 地土を 肥 淡小便冬二皮 春芽出 前

五皮 茂る 分株 冬 一方 朝夕の間 剪得て 姑置 土に

漬む 時切と 焼 冷水 漬か 又方切にて 割 和木 唐

鹿尾藻 右二味と 冷水 漬か 後用 べ

○壇持 蘭蕉 花黄なり 赤なり 形 蕈荷の花 細長き ぐ

開花 五月上旬 あり 是を 新根 土に 圍ひ 置 春 彼岸 小移 五月 咲く

○ 方日向地畝と高くして一分湿り〜 湿氣多き時の枯朽あり 土
 多〜 肥淡小便春芽出〜 前二三枚又花前より〜
 下種移春いんり 三月中〜 新根野いす〜 地二三尺を掘砂と
 ちん其上小樹と布又乾き土と布で新根と並べ又土と厚く敷きて
 おふ〜 覆の置を〜 剪花升水〜 した時の切口を改切〜 凉水〜
 後水器小杆〜 或を焼〜 又方朝夕小切得〜 藁灰
 汁〜 煮色変〜 所〜 切去〜 冷水〜 杆〜 後〜
 又方 和本艸 唐鹿尾藻二味と〜 煮も〜
 ○ 日々艸 花小莢 色淡紅又白り 开花五月上旬 方日向地分

○ 湿り 土を〜 肥淡小便 下種 春いんり
 ○ 小車 俗小野車と云 色黄〜 小莢集り咲〜 开花 育方日 艸
 同〜 水氣と避〜 又方朝夕の間に剪得〜 姑置〜 腐〜
 時切〜 燒冷水小漬〜 又方切〜 割 和本艸 唐鹿尾藻 右味
 冷〜 冷水小漬〜 後用〜
 ○ 大山蓮 天女花 花白大〜 椿の〜 开花 五月上旬より 六月上旬迄
 方日向地二分湿り 土回莖肥 大便寒中に入〜 移春いんり
 接〜 同時小莢接〜
 ○ 薺 花種々近世異花數百品收挙〜 育方畧之 开花 五月

亦花は結ぶ是と三番咲と云ふ七月より十月まで漸く咲たり方尚地二分湿
土回込 肥魚の絞粕 移秋ひん後く 櫻春ひん二年 菱と三寸
さうりた切く打べー成長五尺よりやうかり

○金絲挑 花重 色黄 開花五月 梅天より半月計もちり 方半陰

地半湿 土回込 肥大便寒中に入れ 株九月中に分植し 櫻春ひん
は枝三寸許り剪り少く斜に打て即時は日覆をべー 後指頭をめて土乃
乾湿と歴く試へー指形の連ぶやうかとの可く堅くして指點ありのハ
既小乾くを以時水と流ぐべー 後又乾堅かる時ハ淡少便と灌ぐべー
寒中にも大便と入れ 葉ハ柳小似く枝を館色之葉長じて丸うた

積氣と治るた妙ありと云う剪花の時を日に出るまでせり 其後の
花をむかり 升水に切りうよ 鑪でうけく打やべー

○金絲梅 花重 色黄形梅に似たり 開花五月 方地土肥 株櫻等

前小同 葉丸くして柳小似り花より先おけり 金絲挑は葉成
求て積氣は劑ふあると和華舗謬混して此葉と共うまて治せと
やあん剪花の時を早朝く 升水も金絲挑ふみり

○万年青 老母艸 藜蘆 周屋 花黄之 開花五月 方二分陰

地中湿り 土砂雜 肥油粕年中用つべー 又はあん絞粕より乾みり
粉とかりて入ぐ 干鯛あとの油物を悪く是もよく乾きくた粉とて

新花譜前篇卷之三
五月廿九日



小町草

蓖麻子



金絲標

蝦夷檜扇草

新花譜前篇卷之三
五月廿九日

入る可くさきやれん如く分株下種移而彼岸共ふるべし
 花壇小植もよう一大概盆栽の方勝まり夏日の葎簀で以日覆るべし
 夕方より取らるるべし冬日の風寒雨霜を防ぶべし種類多し挿花を用ふ
 り其三四種の都の尉○宗碩○長島○筑前○久安寺共外白縦班
 黄縦班等種類異名かゝるもの數多し花実葉四季は應じて用ふるもの之
 因云葉筒も成く左右合せ目を形拾吹矢羽の如く長九寸許纒ふ
 一株而已豊後より産り一覽せしん寔ふ希代の雅種なり

○南燭 花白之花莖小枝なりて少英群擷て一房とあり 開花五月方半
 陰地三分濕土回莖肥えたる分株移もつるもよう

播春ひんよとく一接同節寄接之實は十月よ熟と赤りり白ありま
 一種葉とつらり葉は莖三本づ並びて後より又葉の終はどく
 かりとのありつづも挿花不用ふ也此幹と接あむと方紙と枝を巻
 て水で浸し火よりけて焼く自由曲ると傳を大概同じくんと其
 傳の如くしてかゝるるなり是を理の如く其をた拙れ
 ゆるかり此紙と巻を雜中に捲く巻べし又水に浸して沸湯で洗き
 て火を去るべし火氣通るまで多て一時の曲りかゝるまど和ら
 がる所をよく炙く徐々につまみ速に色を弾くると曲結て
 冷水に入ると反ると是は焼くべし是は焼くべし是は傳之

○紅花 ベニのまゝ 未摘花 莖艸花 花の色濃黄く老たり 開花五月 方日向

地二分湿り 土々々として 肥 淡大便 ぬる灌がらば 金鑄とて葉は星の如く

かる黄に點入風とじて専らにさじ 下種秋彼岸ふまじ 升水へ焼じ

○ぬる艸 ぬる 花青く紫の色と含めり 白虎の尾の向し 開花五月より

二番切三番切ともぬる 九月までなり 方地土肥株 必ず切時升水の

方虎り尾艸なり あり

○蘭 らん 花青色小黄色と含めり 開花五月より七月下旬迄なり 香氣賞

とく 方六分陰地二分半湿の例にささげ 土長流砂と微細に篩ひ整へ

て盆栽小とく 肥 鯉節の煎けを平日小澆ぐとく 移 二月中旬は

根小腐入るとは清水とめてわらひ水氣と拭ひ去く 植べし長二ふり

よく生育とくを三ふも 七月を葎簀とりて日覆とく

夕さより葎簀と取除き夜露と度じ雨天より雨覆ひとく 秋彼岸

より屋内肉つ又ハ温室ふとく 初冬前より油障よとて風代

防ぐとく 風多れ日を日の光と當もとく 此時より末夏頃迄油

障子と開く夏あられ四月より後風あれ日の開ても上 寒中地害ふとく

○縦班蘭 そま はん 花青色小黄色と含めり 開花五月葉小異班種とく

畧して攀は是種類は長く 育方前ふ同く

○晝白 ひる 花白淡紅と含めり 開花五月中旬郊野ふ生は蔓とく

忽ら凋じりの冷水と運水二三枚とて一活出く勢ひ降るくちりて

○小町艸 花白く中葩黄之花は形定く葉細く 開花五月中旬

海濱小舟の舟うら生ぞ 泉州濱寺田ふ多くあり

○有馬艸 花黄色葉を縮りて形ら山菜萐の葉少なり 開花五月

中倉河州生駒山小産と里くを賣らざり 名やふ池田の栽樹

家々も植育るごとく得と

○錦木 花せし色淡白 開花五月中旬 方大旨向 地三分湿 土糝を

肥大便寒中よ又春芽出の節油糞をへ 移十月より春芽出

接寄接之砧を雌木く 雄木の矢羽の如く木の枝の左右より雌木の

矢羽もたの之實は七月より赤くあり十月より霜やふく月々
実収る形松木実よりて頭少く割るあり

○唐桐 花極細英攢簇て房も多し 開花五月より飛候て樹

咲出く七月末まであり 育方隨意なり 盆栽よて可也

○椴欄竹 花の色赤茶形ちよ 開花五月中旬 方三分陰 地分

温土よく肥大便寒中小令く 分株春彼岸後より 又秋の土用後芽

と缺分植べ 同種小観音竹とあり長三尺許は過と上居る育方同

○仙翁花 剪秋羅 畧てセシものなり 花赤 開花五月中旬より八月まで咲

方旨向 地三分湿 土及埃土 肥油糞 分株正月芽出く

類神譜傳前篇卷之三

○四季咲燕子花 花青色 開花五月中旬より咲ゆり曼(二)夜目(一)を

夏丹花あり又土用より秋の花出(二)夫(一)より凡(二)十月(一)月(二)節(一)花出(二)故(一)不

四季咲の種(二)り(一) 育方(二)三月(一)燕子花(二)同(一) 八月(二)月(一) 八月(二)月(一) 八月(二)月(一)

○扶桑花 俗(二)ぶ(一)サウ花(二)云(一)舶(二)来(一)種(二)花(一)重(二)色(一)濃(二)紅(一) 開花五月中

旬(二)形(一)容(二)木(一)槿(二)小(一)似(二)り(一) 方(二)向(一)西(二)月(一)より八月(二)月(一) 葎(二)簀(一)と覆(二)す(一) 地(二)盆(一)裁

九月(二)より(一)三月(二)迄(一)温(二)室(一)ふ(二)合(一)て土(二)回(一)莖(二)肥(一)油(二)糟(一) 移(二)三月(一) 櫻(二)春(一)ひ(二)づん

又(二)梅(一)天(二)の(一)つ(二)と(一)り(二)長(一)三尺(二)許(一)多(二)分(一)地(二)寒(一)くて生(二)育(一)と(二)り(一)ゆ(二)ち(一)年(二)中

花(二)の(一)つ(二)と(一)り(二)開(一)花(二)の(一)時(二)を(一)つ(二)月(一)の(二)ま(一)き(二)を(一)つ(二)と(一)り(二)三月(一)四月(二)を(一)花(二)は(一)

五月(二)より(一)花(二)多(一)かり(二)ま(一)と(二)開(一)花(二)の(一)と(二)り(一)五月(二)より(一)ひ(二)つ(一)だ(二)り(一)と(二)り(一)

○寒薄 穂(二)五月(一)よ(二)出(一)て方(二)向(一)地(二)分(一)湿(二)土(一)回(二)肥(一)淡(二)便(一)寒(二)中(一)三(二)夜(一)深(二)く(一)

分(二)株(一)秋(二)彼(一)岸(二)り(一) ○班(二)三(一)種(二)並(一)葉(二)又(一)矢(二)筈(一)班(二)あり(一)蟻(二)通(一)と(二)り(一)六(二)縦(一)筋(二)班(一)入(二)て

○二季咲菘 色(二)赤(一) 開花五月(二)より(一)六月(二)中(一)より方(二)地(一)土(二)え(一)と(二)り(一)

肥(二)大(一)便(二)寒(一)中(二)に(一)合(二)て 移(二)分(一)株(二)も(一)冬(二)より(一)春(二)彼(一)岸(二)と(一)り 升(二)水(一)を

酢(二)煮(一)と(二)り(一) 己(二)下(一)菘(二)育(一)方(二)升(一)水(二)の(一)方(二)並(一)び(二)同(一)り

○檜扇州 花(二)重(一)色(二)黄(一)と(二)り(一)葩(二)本(一)小(二)黄(一)朱(二)の(一)點(二)あり(一)葉(二)并(一)び(二)檜(一)扇(二)州(一)

似(二)く(一)中(二)高(一)く(二)伸(一)び(二)たり(一) 開(二)花(一)五(二)月(一)中(二)旬(一)より方(二)向(一)地(二)分(一)湿(二)土(一)回(二)肥(一)淡(二)便(一)寒(二)中(一)三(二)夜(一)深(二)く(一)

肥(二)油(一)粕(二)移(一)正月(二)中(一)り 己(二)下(一)の(二)諸(一)檜(二)扇(一)州(二)も(一)小(二)育(一)方(二)同(一)り

○國部檜扇州 花(二)形(一)ち(二)も(一)尋(二)常(一)の(二)檜(一)扇(二)州(一)同(二)種(一)あり(二)其(一)低(二)と(一)り

新花譜傳前篇卷之三

五月

三月

四月

曲り屈むぢぢ小花茎剛く延びたゞ丸く纏られ其竟小外お出く咲く

開花五月中旬 育方前同

○水葵 浮蓄をたもとり色青又白是上葉 開花五月中旬より

九月迄花有り 方水田溝泥お生れ 下種春彼岸より長二尺四五寸

やうぶ剪得く艸葉と水お浸らる或を水藻お敷く七花と色と葉のそ

よく巻水小く取上後逆水して置きそりて之へ 又方和本州 唐鹿

尾藻二味を切てよく煮べし 莖短なるの由ふ七八歩をうり陽り

入ぐ 後冷水お挿置よく水よく用ふべし

○菟麻子 花淡黄色 開花五月中旬より十月まであり

方日向地二分湿 土莖交 肥淡大便 下種春彼岸 方地如是なる時を

高と置尺ふちるる者長大きものて好む時の方三分陰地四分湿ふり高と

七八尺より一丈もいづる一房長二三寸より七八寸より至る花莖の中程より

下の方よ之き英群り咲中程より上あつりて形朝鮮樺の実小似て色

青く大と楊梅子の程あり實と廿箇許結ぶ花の実小なり別々莖心

にも亦葉は桐葉の枝にも圃に實登りて花尚咲たり葉の形も楓の葉に

ごとく七辨はく大さ徑の一尺許り上は方葉段よせし此葉大甲共小

切捨へし仲秋迄の水よぬめの之此時の切てよく焼て逆水よへし尚も

水よりこたれ時の酢煮よへし仲秋已後の水おけりて升る

○辨慶州 花の色白く微紅と含あり形も垂くせき一房とあり開花

五月より六月より八月迄あり 方日向地乾土を以て肥淡小便抹

春彼岸掘出して古株と去り新芽と分植べし是日と歷て三分交り

の小便とくくへし長七八寸あり頃葉生ずると至くはやく

心と配りて早朝を取捨べし或は木灰汁或は煙州の葉汁を以てくくも

よし且弥地を葉虫も多く生じ株も瘦く育ちがはして花枝の

凋じ物屋上小在く炎天中當る尾上を以ておつて芽と生じ白根は

あつてせうとほつたものへは種が弁慶州の名も入あり此葉は蚕豆の

葉と同しくのみで吹ざりておつてのゆゑお見女子の翫おもてたり必

弄むむとあつれ若砂糖と合し嘗て失命とある也

○蒲穂 五月下旬之水田に生れ 株秋彼岸より挿べし ○大蒲の中

蒲 ○姫蒲此姫蒲を穂とす長を同くして出さる

○最上百合 花を並百合とくく其無低くして悉く仰れ

咲甚奇花に 開花五月下旬あり

○竹島百合 花真白なり 開花五月下旬あり

○鬼百合 花の色赤く濃赤の點斑入り 開花五月末之莖高き

六尺もやうよの枝四方小出て一房とあり其もあつた六寸筒

より多きと三十葉も生じたり

○蝦夷檜扇艸 花二種赤色黄色最上品あり 開花五月末あり

育方既小上其葉小出より形容花莖短く葉もろゆるてよくあり
長七寸小過どのの雅曲ありて初心挿花よく甚妙あり種の中は
冠るものて株をあげばも殖ぐらんものあり

六月開花之部

○桔梗 花二重 白色 青色 二種 開花六月初より一番二番三番

生で漸く剪て後吐咲を十月小つゝあり 方日向地二分湿土え
るに肥干鰯とけく入る淡小便も愛く灌ぐべし 分株春芽出

のたれさるべし 且平莖あり俗小ひらりとて専ら好めり 升水ハ
切口を焼くべし 焼只切捨てもさるべし さらば切らざるん如く
又方朝夕の間に剪得く姑おれに潤ゆる時切とよく焼冷水ハ
漬やぐら 又方切口を割和木艸唐鹿尾藻 右二味とる
焼て冷水漬おきて後用之 但枝振の行きを竹ぶらに括り
付く升水さるべし 又曲と好むるも思あまきりまけ付て升水を
是ふかきり都々艸花と伸屈せしむ如此さるべし
○八重桔梗 花青 開花六月初 育方桔梗小同 二番切の
時一重小咲愛くともまらるべし 升水も桔梗小同

花... 前篇... 三... 六月... 三...

○鬼若 夏菊 色淡赤 開花六月初

○山崎 同 色濃茶赤 開花同上

○初瀬 同 色中淡赤 開花同上 池田乃初瀬と上品と凡つては

○菊も 升水の切口と焼べ

○壇特 蘭蕉 開花六月上旬 育方五月壇特は 下種 春彼岸

水上げつた時を剪口と又切放し逆水して後水器ふけ置

ぐー或を焼くも有り 又方五月壇特小同

○縷紅艸 花の色極鮮英手く之く葩五辨して形は薺小似り

長六七歩小過げ 開花六月上旬 方日向あんな地一分陰 方一分陰

あんなの地乾き 土摺り 肥油粉芽出 後よりい

下種 春彼岸 芽と出るとの甚遅くもの最早も

待て疑ひく必切芽らうらうらとあう下種して十五日小生

りり尚或は五六日或は十日廿日よりも段々後と芽生

そのまわり一時小出揃ふもの小わが都て種

午房人參の種も亦同じ葉は形は眠州の葉

細く長守許ありた蔓物うて竹を枝或は艸莖等と建副

挿花の料あり願くは横利く物と建副

○木槿 花十重 色赤形は女子の 開花六月上旬 此千重の

前花翁傳竹菊卷之三

赤も赤宗丹とて千重の花の水土とて一重花の如くして水尚上ぐりて
き時を切て又切故く上酛を煮る

○女郎花

花黄 開花六月下旬 方三分陰 地中 湿谷 相小 自出

生あつて花九月下旬之此種類元是山生其ものぞる故小土肥等と

走らぐりて是を以て推くまぐりて分株春彼岸より剪時

ハ早朝然とて升水に切を焼ぐりて下に出る同種首方升

水並同 又方朝多る間小剪得て姑置少く凋むる時切

とて焼冷冷水漬せぐりて又方切を四ふ割和木艸 唐鹿尾藻

右二味とて冷水漬せぐりて後用之

○鼠尾艸

溝萩 花の色赤形之く秋萩より花豆花の如く

あつて開花六月下旬より七月迄あり 育方 大槩秋萩の如く餘々

隨意ふとて分株葉の葉ふ入る後より春芽出

前より小とて升水に萩並同

○玉簪花

即擬宝珠草 色白 花形上より 開花 宿中より八月下旬迄咲

方三分陰 地土より肥淡小便芽出ると二三枚花前小四五枚洪ぐ

茎一尺餘より二尺四寸より分株 春彼岸前又九十月より

○早紫菀

花紅 藤色之形 小車に似たり 開花 六月下旬 方三分陰

地掘りて土回莖 肥淡小便芽出ると又寒中より春にうけて

後冬移の冬より春芽出前種登げ根玉の
丸く大ききもの挿と植て悉く花出より小玉長玉の花より
己下諸紫苑苗方並の同

○唐紫苑 同種色紅藤 開花六月中花枝より幼りて小繡球
花の甚小似り是と上品

○澤瀉 水乃がうり 花重又八重ある茶丸く色白く 開花六月

方畷地水田土肥摺り 分株早春より二月まぐり
升水の方水三合ふ木通三合より入く此煎汁と木筒の水彈込
りて切らうりてなるといふ 竹水筒より水勢弱く花も動搖

して悪く 又方和本艸唐鹿尾藻右二味とりて剪はうり煮て
其後冷水小杆置りて水止り用之

○まぬぢう 花の色黄之形木綿の花小似り 開花六月より八月頃

まぬぢう 方畷地二分湿土より 肥大便寒中入り 芽出
前小干編と入る 分株冬より 櫻春彼岸より三月迄
葉の椿のごとくして丸く和らう之葉は色表少く白み及び裏の真
白く恰も蓬艾の色なり 水上より時切は叩く

○丸鶏頭花 花赤く形玉の如くして長く先尖より 開花六月中
旬より七月中後より 方畷地一分湿土摺り 肥淡少ん

本草綱目卷之三
六月四日
子

縷紅草



能勢蘭



檀特花

本草綱目卷之三
六月四日
子

下種春ひかん 移芽三寸より伸へば 此時西三枝花前二枝

淡小便してとぎて

○挟竹挑 花重なり八重あり色蕾はひく赤く開くは濃紅なり

淡紅と絞りたるを 開花六月中旬より七月中旬迄咲く 方地土掘

とど 肥 大便寒中ハ両枝入へ 移十月より 摺分株も春

彼岸より 升水と切と焼べ

○岩藤 花赤紫色 開花六月中旬 方三分法 地二分湿土を

とど 肥 淡小便芽出の時に中程より花前二枝都合三枝あり

又干籬の出しけ水交とて殺流べ 株春彼岸分植べ 升水ハ

切口と又切莖葉莖の類小色と水小浸し置後水黒小杆ゆへ

○早神遊 夏菊 色黄 開花六月中旬

○鬼菊 同中輪 色赤 開花六月中旬 元小菊之芽を揚ぐ花二輪

残日中菊とあり此花開後より九月末まであり

○朽葉菊 同上 花千重色極黄小赤と合あり 開花六月中旬

此花後より九月下旬迄ありと鬼菊の如し

○孔雀檜扇州 花二重色黄にて葩本小黄朱點あり半延るるは

葉縮んで雅あり長二尺餘小く勢ハ孔雀の尾小似たり 三月方

同種小等より 開花六月中旬あり

○田村州 花色淡赤形薊小似り 開花六月中旬 方三分陰 地三

分湿 土々々々 肥淡小便春彼岸より花前小五つととぶ

下種 分株も春ひんより 葉薊小似く芒刺あり

○澤桔梗 花の色青小紫と帯あり 開花六月中旬

より九月末迄咲出づ 方半陰 地二分湿 土回莖 肥淡小便春ひん

小ととぶ 移春彼岸より 是山茶小多く生ざりて花形も

本薊小似く葉を細長し 升氷の切口を焼く 焼口はききも

可ぬまじく切らざりてさうど

○蔓まぶら 實を六月赤色に 方日向 地干 土々々々

肥大便寒中に入て 元山生れり故小水氣の厭之 実形茨の實の

ごとく蔓形藤小似く葉はか 未熟はるるものと切落さるるを

日干用する時はおらぬ尤里小作らるる都て山里中くおらる

○鹿の子 花地白小赤茶の飛點あり入り又淡赤紫の鹿の

子班入るるあり 開花六月中旬なり

○金剛山 百合 倍小為朝百合より白地小赤鹿の子の點あり 開花

六月中旬河州金剛山小生む他所小下種分株しても決して育つ

ことあり 此花は陰干しをせしめられた浸しやれぬ小附るよ

其切らるる妙ありとと

○秋海棠

花重色淡紅 開花六月下旬より九月迄花あり

方七分 蔭地中濕 土舞莖 肥淡小便春芽出 小三枚焼ぐ

だ 此卵を用以て 下種 春彼岸 分株も同時 秋花あり

十月頃迄小種子で収む 剪花時 各方の露を帯びるのよし 又未明

の露をりても可也 升水の剪得く 勢以強きもの切りと焼てよ

よ 此卵をのり木灰汁にて煮るべし 又方朝 夕 剪取節を洗

小刀にて切目へ入る沸湯小灰の灰へ切とて 煮て後上下残

らぬ冷水に漬込 其後根本許冷水に并せて用ひて 小露氣有

るに 又方 和柔州 唐鹿尾藻を煮るは 此卵の所

○六月

○凌霄花

花の色外葩黄中葩赤 形萱艸より水く尚上 開花

六月下旬より七月中旬迄花あり 方地土肥 分株春秋

兩彼岸より 挿花して 水かき 葉保つれば

花初むん水より 時を花のり 葉凋む 升水の方

叶を 唯朝剪りて 夕方迄の花葉保つれば

○白山葛

花潔白 莖群攢く 頗る香氣強 開花六月下旬

育方随意に俗にデシシと云ふ煎服して 小便閉を治す 或曰大毒あり

服すべからず 或曰デシシと云ふは 此卵の所

三種とも俗言あり 或曰蛇草或曰白山の字や 名偽等と考へば

○茶引艸

雀麥 茶賣草 花黄色形切草に似たり 開花六月末

より七月中旬迄あり 方半蔭地 三分湿 土を多量に肥 大便寒中

よ入る 移 秋九月末より十月迄より

○郭公花

油點艸 花二種黄色より葩中筋黄 汁にて左右淡黄

の隈は成る又赤あり 淡赤を小丁子茶に色と帯り 形鐘艸に似れ

ども花仰りあり 開花六月末より 方半蔭地 三分湿 土回壅 肥

油糟より 小便澄げば葉焦ると干鯛の出汁 二分雜の水で焼

くべし 分株春彼岸より 成長する中 黄花の大ききもの

一尺許の赤花の大ききもの三尺餘もやぶあり 若水のいりり

時を切と敲き爛して強き灰汁にて煮るべし

○萩

倍小篠より 又日野より 穂六月末より 七月小

りの葉ももれ用ひ 方日向地 二分湿 土を多量に 肥 淡少ん

移春ひんより 升水と酢煮るべし

○能勢蘭

又慰蘭 花二重色白 開花六月末より 方半蔭地 二分湿

土壅土 肥 淡小便寒中 又春芽出 前又花前より 西二枚の院

より 大能勢蘭は長三尺許中能勢蘭は二尺三寸許小能勢蘭

の四五寸を 移春彼岸より 三月上旬迄より 若偶五月咲とあり

此花水上より 是を上酢にて煮るべし

真直
内庫

剪花翁傳前篇卷之三

六月九

三

○高良薑 くろくろらん 又鵬蘭 ふせらん 花白小朱筋入あり 黄小淡黒帯 き しみけい

あり花の莖の頂小出と開花六月末之 爾方升水の方詠 そとくうこ ちゅうみづのほうえい

蘭小同ト立春年尾小在の開花六月下旬之立春正月小在の開花 らん せま りゆんごうのせ あれ ちゅうあはせん ちゅうあはせん

七月上旬ありの月立立秋前之詠あり しちがつじゆうかんありのつきたてたてあきまへのかいあり

消印
真直
内庫

剪花翁傳前篇卷之三

